

とほく2015

在宅ケアの行く先

認知症初期集中支援

午前9時半すぎ、仙台市泉区にある「いずみの杜診療所」のデイケア施設に車が到着した。自営業の中村通さん(61)＝泉区＝が妻(62)を送って来た。週7日、土日祝日も朝夕の送迎を欠かすことはない。

働き、5時間眠ったことはなかった。頭がもうろうとしていたが車での出張も多く、常に気を張っていた。知人に相談して初めて、認知症の相談窓口である地域包括支援センターの存在を知った。そこでいずみの杜診療所を紹介され、スタッフの家庭訪問を受けた。居場所見つける

妻は当初、デイケアの利用を拒否していたが、同じ物ばかり料理したり、汗をかいた服をそのまま押し入れにしまい込んだりするようになった。日中から飲酒してスーパリーに入り浸る。止めようとすると不機嫌になり、腫

④ 診断後のサポート

専門家の助言が不可欠

れ物に触るようになった。

不安に駆られ脳神経の専門病院を受診すると、脳が萎縮しており認知症と診断された。1年間通院して薬を飲んだが、症状は収まらない。目が離せないし、自営業なので仕事がなくならないことへの不安も大きかった。中村さん。妻が寝てか

心身すり減らす

異変は、妻が仕事を辞めた2年前から顕著になった。以前は普通に家事をし

用をいやがったが、今春ごろから表情が穏やかになった。毎日、ボランティアへと中村さんは言う。

わり、前向きに生きる妻を見ると「自分も頑張れる」と中村さんは言う。

立て方など「専門家の助言がなければ苦すぎる」と訴える。

「告知され、傷ついている人への、その日からの支援が必要だ」。山崎さんは診断をする医師には「少なくとも、本人が集える場や地域包括支援センターが開くサロンのなどの情報を提供してほしいと呼び掛ける。



デイケア施設に妻を送り届ける中村さん。「夫婦で共に育っていきたい」と前を向く